

[2015_001]基幹教育紀要表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1495416>

出版情報：基幹教育紀要. 1, 2015-03-12. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

創刊にあたって

大学教育の重要な使命は、確かな学問体系を土台としながら、人類社会が抱えている諸課題に対して、自由な発想と柔軟な思考力をもって創造的・批判的に問題を発見・解決し、先進的な知のフロンティアを切り拓いていくアクティブ・ラーナーの育成にある。その人材育成のためには、大学入学の段階で、高校までの受身的な学びを、大学で求められる能動的な学びにチェンジすることが、まず重要である。なぜなら、基本的な知識の習得に主眼を置く高校までの学びに代わり、大学での学びは「未知の事象やまだ解明されていない課題を探究すること」が主眼となる。それゆえに、学生ひとり一人には、「明確な問題意識をもち、自らの問いを立て、真理を追究していく」姿勢・態度の学び直しが求められる。

大学での学び、いわゆる学問の世界は、ひとり一人に開かれた、自由な思考の世界である。ここでは、基本的知識を貯めこむだけでは、新しいものを生み出すことは難しい。なぜなら、知識は基本的には過去のものであり、新たな状況・文脈での適応価値は無に等しいことも多々ある。大切なことは、「考え方・学び方を学ぶ」姿勢・態度の涵養である。既成の枠に囚われない、奇想天外な発想が、時に、新たな発明・発見をもたらす。その意味では、「知識と思考との間には反比例の関係が成り立つかもしれない」という認識のもと、一つの課題に取り組む時にも、多様な視点から創造的・批判的思考を働かせる体験の積み重ねが必要・不可欠となる。

九州大学では、26年の4月から、新たに基幹教育がスタートした。「考え方・学び方を学ぶ」教育に軸足を置き、従来の座学中心の知識詰め込み型教育に代わり、学生ひとり一人の問いを重視した学生参加型の体験型授業を多く取り入れることで、主体的な学びが、学生に自ずと涵養されるカリキュラムである。「創造的・批判的な思考は、他者や状況との関わりの中に拓かれる」を礎にした、「”ものの見方・考え方・価値観“の異なる人との協働構成による対話型の学びや、失敗から学ぶ過程重視の学び」を多く取り入れた教育組織となっている。クラス編成にも工夫を凝らし、授業内容に応じて、多様な考えや学びの交流が創出されるような異学部・分野の混成クラス編成もある。

入学直後の段階での、こうした個々の異なる考えを尊重した授業体験を通じて、学生は「問を生成し、主体的に学ぶことの大切さ」「視点や立場の違いで考え方が異なる」「異なる知を交流することで新たな知が創出される」こと等を実感するに違いない。しかし、頭の中で実感できても、高校までに身体化した学びスタイルを、大学での新たな学びスタイルにチェンジすることは、容易ではない。学び直しに向けた、絶え間ない自己省察が必要だ。

いや、基幹教育での理念を具現化し、アクティブ・ラーナーを育成していくためには、教員自らが、従来の座学中心の実践技法を、学生主体の参加型授業形態にチェンジしていかなければならないが、教員にとって、その「学びほぐし」は、学生以上に難しい。なぜ

なら、多くの教員は、長年の経験世界の中で培ってきた座学中心の実践技法を正当化し、一種の「有能の罠 (competency traps)」に嵌っていることにさえ無自覚である。学生の「学び直し」を図るには、教員自らが、「有能の罠」から一歩抜け出し、新たな実践技法を学び続ける姿を見せることが先決である。

基幹教育院では、学生と教員とが一体となり、学問追求に相応しい「学び直し・学びほぐし」を求めて、学び続ける組織体であることをスローガンにしている。基幹教育元年にあたり、今年、高等教育に関する学外の第一線の教育・研究者を招き、“創造の泉”となる数々の刺激的なシンポジウムを企画した。その内容を「紀要」に掲載することにしたので、ここにお届けする。また、基幹教育にかかわる研究・報告を今後「紀要」を通じて問うていきたい。については読者からの屈託のない創造的・批判的コメントを期待したい。そのコメントを一つの学びの原動力とし、また、新たな歩みを始め、日本の高等教育に大きく貢献していきたい、と強く決意しているところである。

平成 27 年 2 月 27 日

九州大学 基幹教育院長
丸 野 俊 一